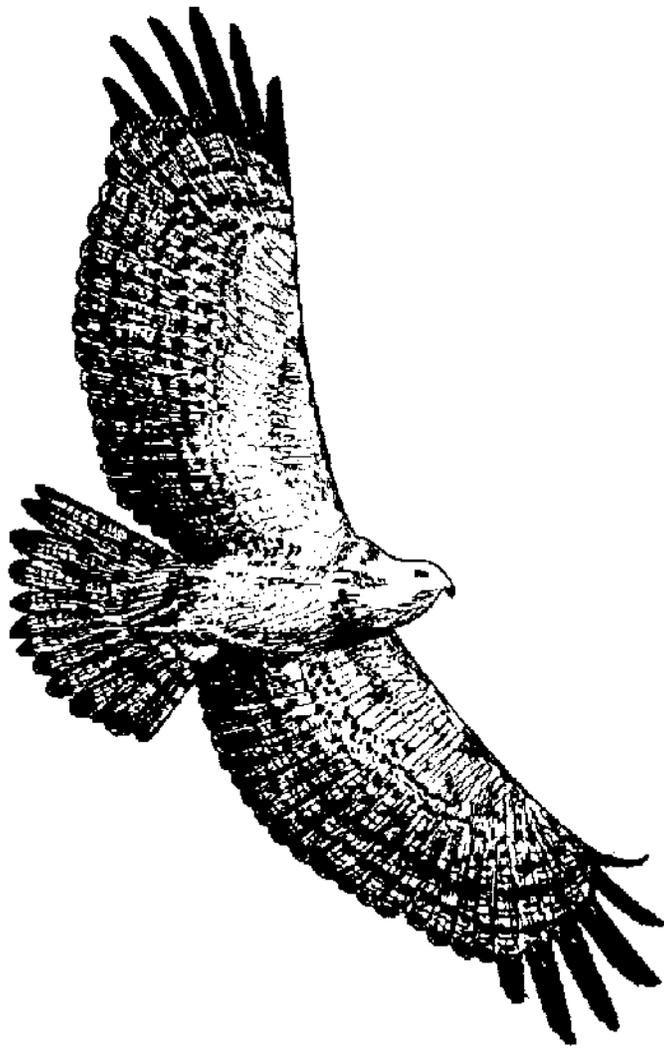


しんせう

第31号



2001年 6月

(財) 日本野鳥の会 三重県支部

● 野鳥観察をする姿勢 ● 杉浦 邦彦 (支部長)

情報網が発達したこのごろは、ハイカラな言葉がよく目につく。その一つに「エコシステム」という言葉がある。日本語では「生態系」と訳されている。これは一体どんなことだろうか。現在、私達が生活しているこの地球という星は、誕生してから46億年という長い年月を経て現在のように様々な環境が生み出され、地域毎に多種多様な私物の生存を支えている環境ができ上がった。その環境要素の中には、環境に適応した多種多様な植物や動物が分化し、進化と適応を繰り返し、お互いに密接にかかわり合いながら生活し、いまもこれは続けられている。いま、私達が昨日、今日の短時間でこのような変化を目で確認できるものもあるが、遅々としてそれと気づくことの困難なものもある。このような漠然とした自然のことを「生態系」というまとまりでとらえていくということが常識の社会となってきた。

ちょっと野外に目を向けて見よう。春の里山は実に美しい。「緑」といっても白、黄、赤、青、紫、黒、茶といった様々な「緑」があって到底言葉では、表現できないほど多彩である。まるで季節が笑っているようで、フィトンチットの香りさえそれぞれに感じる。それらに合わさるように、野鳥達の声は、普段聞くことの少ないとっておきのラブソングや縄張り宣言等のための鳴き声で山は賑わっている。

彼等にとっては深刻であるが、私達の耳には平素のストレスの解消で唯一の安らぎを与えてくれる。とてつもない大きな演出者達である。癒しの達人である。

この演出は、主に桜の開花から始まる。桜の開花を満喫しようと戸外へ出ると、花は子房の根元から花軸もろともに切り落とされ、花が散乱しているのに気づく。

都市部の並木や公園に多く、駐車場に桜があると樹の下の車は、花自動車になっていて驚くことがある。犯人は観察の結果、スズメと判明した。スズメは嘴峰が太くて、桜花の蜜がヒヨドリのように吸えないので花を千切って蜜を頂戴するのである。鳥は舌が厚く味覚は区別できないと言われていたが決してそうではない。殆どの動物は甘味のは大好物である。甘味は脳の活動に大切なエネルギー源となるからだ。脱線したが、この桜花の現象は、年々増加の傾向にある。三重県下では都市部に多い。アオバトやキジバトが桜花を啄んでいることもあるが、先般TVニュースを見ていたら九州方面では、カワラバト(ドバトのことを最近、名称を変更した)が桜の蕾を集団で啄んでいる映像が出た。問う理由なのか鳥の食性が少しずつ変化していることの証拠である。食性の変化だけではなく、種の保存に最も影響を与えるものに繁殖行動がある。

目次

今月の表紙 絵：田中 豊成

- 巻頭エッセイ・今月の表紙・・・1
- 特集 支部の活動
総会開催・・・・・・・・・・3
各部紹介
保護部・企画部・事務局
編集部
- 各部の活動・・・・・・・・・・7
- 会員のページ・・・・・・・・・・8
- 探鳥会報告・・・・・・・・・・12
- お知らせ・編集後記・・・・15

田中豊成(名張市)

ハチクマ 今月の表紙
伊賀地方では、いわゆる里山で初夏から飛んでいる姿をみかけます。サンバやオオタカ等とよく似た環境に棲んでいると思いません。大きさはトビ位で、時には番で悠々と大空を帆翔してします。ハチクマは、猛禽の仲間ではハチの幼虫を好む特異な食行動が有名です。体の仕組みは、ハチに刺されても大丈夫な構造になっていてのでしょうか？

里山で繁殖していたのに何故なのか都市公園、街路樹、それに人家の庭で営巣しているものにキジバト、ヒヨドリ、セグロセキレイ、キセキレイ、コゲラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ハシブトガラス等が目立つ。海岸の崖が繁殖地であるイソヒヨドリは、内陸部の街の高層ビルで勢力を張っている。似た行動を取る鳥にイワツバメがある。亜高山帯の崖場から低山帯の街中の橋板下の桁でゆうゆうと繁殖行動が盛んである。カワセミは多自然型とは言うが護岸全体がコンクリートに変わり自然石や擬似岩を使用した河川改修で営巣環境の悪化が、自然の土のある土手を求めて山奥と新天地を開拓し、水源地近くに追いやられる傾向にある。50年前には見るできない現象である。



カワセミ

さらに、溪流生活をするカワガラスも似ている。

彼等は、小滝の裏側に営巣するのが自然である。ところが、今は橋桁や通水しなくなった大型暗渠内で営巣する。巣の様子はコケでサッカーボール程の球型の外観が本来の姿であるが、今は椀型となることが多い。これらの現象は総て彼等の環境に対する適応の姿である。総てがこのように変化するとは限らない。対象となった全固体の一部だけである。

私達は、生物として同じ仲間が、一部の人間の仕業によって身近な生態系の変化をきたすことは何かの警鐘を発しているのだと謙虚に受け止め、環境の保全に努めなければならないことを痛切に感じる。私達は野鳥を通して、周辺をとりまく生物全体の動きを根気よく見守り、それらの変化の情報交換をしながら新しい進路を提言できる出発点になって行きたい。そんなミレニアムの時代ではないだろうかとふと考えてしまった。

●事務局移転のお知らせ●

本年度から「日本野鳥の会三重県支部」の事務局が以下のように移転しました。よろしく願いたします。

〒

西村 泉 方

TEL

FAX

E-mail

●三重県環境功労者表彰●

さる5月27日、「MIE・みんなで創る環境フェア2001」で平成13年度三重県環境功労者の表彰が行われ、高橋松人副支部長が表彰されました。おめでとうございます。

支部の活動：総会

さる4月22日(日)午後1時半より、津市三重県生涯学習センター大研修室にて、本年度の三重県支部総会が開催されました。当日は若葉香るさわやかなお天気で、議事を行うにはもったいないくらいの日和でのなか、41名の会員が出席され、全ての議事が承認され新年度がスタートしました。

総会の成立

最初に出席者と委任状の確認により、総会の成立が認められました。高橋副支部長の司会による開会宣言がされました。今回は杉浦支部長が欠席されたため、市川副支部長が鳥見の楽しさを味わうと共に、野鳥を通して自然環境保護を考えてゆこうとの挨拶がありました。ついで、議長と議事録署名人の選出が行われました。

議事（議長：加藤光広理事）

- ・2000年度の事業について各部長および事務局からの報告、次いで財務部と監事より2000年度の決算報告が行われました。各部から2000年度事業の説明がありました。内容は別記理事会通信のとおりです。研究部からの報告に対して「報告書は一般会員には配布されないのか」と言う質問があった。これに対して、内容が多く、各会員には配布していないが、希望があれば供覧したいとの回答が合った。財務担当理事から2000年度の決算報告があり、監事から監査結果の報告が行われ、異議なく承認された。
- ・2001年度事業について2001年度の事業計画と予算案について各部、事務局から説明がありました。内容は別記理事会通信のとおりです。これについても拍手で承認された。
- ・「日本野鳥の会三重県支部旅費規程」の出張旅費の支払対象・支払範囲等の明確化した改正案が承認された。
- ・2001年度の一般会計予算案について本年は新しく旅費を予算化したこと、パソコン購入の予算を計上したこと等が説明され、原案通り承認された。

◇ 野鳥講座（2001.4.29）

今年度最初の野鳥講座が総会后、同場所で開催されました。

今回は、里山というテーマで「今森光彦の里山物語」のビデオと里山のパネル展示を行いました。ビデオは以前NHKで放送したものを再編集したもので、非常に美しい里山風景が描かれていました。

同時に展示した鳥の写真も皆さんに好評でした。

2001～2002年度支部役員（任期2年）

北勢地区 市川雄二、加藤光広、近藤義孝、村田芳雄
津地区 高橋松人、平井正志、岡八智子、斎藤加代子
松阪地区 谷本勢津雄、金児一夫、西村四郎、三村通雄、三村明子
南勢地区 杉浦邦彦、橋本裕子、西村 泉、中村みつ子、山田昭子
伊賀地区 塗矢博一、前澤昭彦、田中豊成、西口章

注：下線は新役員

□ 改選に伴い、以下の方が役員を退かれました。長い間ご苦勞様でした。
木村裕之、木村京子、植原葵、中村洋子、保平長三、今村禎、小阪里香

2000年度第4回三重県支部理事会（2001.2.11 サンライフ松阪 2F 講習室）

- 「木曾岬、鍋田干拓地のビオトープ復元について」
 - ・ 木曾岬、鍋田干拓事業が中止されたが、支部として三重県と話し合いを持って、木曾岬干拓地を自然に復元する旨の申し入れを行うこととした。
 - ・ 「愛知県野鳥保護連絡協議会」との共同行動を取ることにした。
- 企画部 2001年度事業計画
 - ・ 2001.5.13 にバードウィーク企画でテグス拾いを実施（鈴鹿川河口、愛宕・櫛田川河口）
 - ・ 企画部として
 - ① 野鳥講座の開催
 - ② 探鳥会、リーダー研修会の開催
 - ③ バードウィーク企画
 - ④ その他 リーダー派遣、展示物・印刷物の作成
- 保護部 2001年度事業計画
 - ・ シロチドリの保護、豊崎は一部に柵を設置し、吉崎は設置せず看板は新調する。また、シロチドリの繁殖調査を全県的に実施する。
 - ・ 重要保護地域調査の小冊子を今年度中に発行する。これまでの調査をしろちどりに掲載する。
 - ・ 名張のオオタカについて調査を続行する。
 - ・ 保護シンポジュームの開催を計画する。
- 研究部 2000年度事業報告報告、2001年度事業計画

2000年度

 - ・ シギ・チドリの調査（春期、秋期、冬期）を実施した。
 - ・ 三重県委託事業「平成12年度鳥獣保護設定効果調査委託」として、安濃町、久居市、度会町の3箇所を実施した。
 - ・ 三重県委託事業「平成12年度ガン・カモ類一斉調査委託」を県下一円で実施した。
 - ・ 2001年シギ・チドリの調査（春期、秋期、冬期）を実施した。

2001年度

 - ・ シギ・チドリの調査（春期、秋期、冬期）を予定。
 - ・ 平成13年度も鳥獣保護設定効果調査とガン・カモ調査の委託を予定している。
- 編集部 2001年度編集方針
 - ・ 「自然保護理念の啓発」をテーマに野鳥を通して自然と共存する考え方を広める。
 - ・ 支部の活動内容を会員に周知すること
 - ・ 一般会員への情報や知識を提供して会員相互の交流を促進する。

2001年度第1回理事会（2001.4.22 津市三重県生涯学習センター 台研修室）

- 2001年度総会について

総会に提出する議事についての審議を行った。
- 企画部

野鳥講座⑨を総会後に開催する。ビデオ「今森光彦の里山の物語」とパネル展示行う。
- 三重県支部理事の役職について

今年度、役員を選出を行った。詳細は別欄に記載。
- 報告等

保護部から「木曾岬干拓地の保全に関する要望書」を三重、愛知各県に提出し、独自調査をすることを申し入れた。



支部の活動

◆ 各部に聞く 2001年度の活動 ◆

2001年度三重県支部で運営している各部の活動について、今年度の予定について、各部の担当者に聞きました。

保護部 部長：谷本 勢津雄 「今年度の保護部会の方針」

再度2年間保護部長を仰せつかりました、谷本 勢津雄です。

年度始めの保護部の方針を少し述べさせていただきます。

基本的に前回の方針と大きく違うところははありません。保護は各自の保護に対する姿勢次第で、どのようにでも進めることができるものです。保護部会はその各自の保護運動をサポートし、バックアップします。私たち保護部で手に負えないときは、他支部や野鳥の会本部、その他の団体に働きかけて、もっと大きな運動を展開します。

現在、木曾崎干拓地の開発に対する野鳥の会の要望、四日市4号線建設に対する要望、三重県沿岸のシロチドリ保護、名張市牛舎建設に対するオオタカ保護運動、その他多くの保護運動を展開しています。

自然と人間の共生を計る上でどこまで人間が我慢できるか、どこまで自然が辛抱できるか、その接点をどこに置くか、どんどん変わっていく社会情勢をじっくり見定めながら進んでいきたいと思っています。もちろん会員の皆さんの協力がなければ保護運動は大きな力にはなりません。

これからの活動に対して保護に対するご理解、ご協力をお願いいたします。

企画部 部長：橋本 裕子 「今年度の企画部」

☆企画部では次のような仕事を受け持っています。

- ④ 支部主催の探鳥会
- ⑤ 支部主催のイベントやリーダー研修会、野鳥講座の企画、運営

- ① 他団体、グループへのリーダー派遣、イベント参加
- ② 販売物担当
- ③ その他 企画

☆今年度の部会員は次のメンバーです。宜しくお願いします。

塗矢博一（伊賀）、斎藤加代子（津）
岡八智子（津）、橋本裕子（南勢）
以上 理事

保平長三（松阪）、中村洋子（松阪）
加島隆子（南勢）

今年度の予定

探鳥会リーダー研修会

野鳥講座「里ものがたり」4/22 済み
その他

編集部 部長：三村 通雄

「今年度の編集部から」

今年度は編集部も交代になり、新しいメンバーで2年間臨むことになりました。

編集部は主に野鳥の会三重県支部の広報活動の一環として、主に「しろちどり」の発行を通して運営をしていきます。

今年度からの支部の方向として、「野鳥を通して私たちの環境を見つめていこう」という方針があります。

編集部もこの方向に沿って、会員の皆さんと共に様々な問題を考えて見たいと思います。そういうと堅苦しく感じられるかも知れませんが、楽しく鳥を見るために、ベースとなる環境もいっしょに見て行こうということです。

そういうことでは、従来からの基本的なスタンスは変わらないと思いますが、もっと幅広く、内容を盛り込んでいけたらと考えています。

最近では、新会員特に若い人が少なく当支部も高齢化が進んでいます。若い人も楽しめて、考えることのできるテーマを探して行きたいと思います。

できるだけ間口を広げて皆様の意見や気付いたことを取り入れていきたいと考えています。

なお、今年度から、編集部も編集や発送等の仕事を分担して実施していくことになりました。

各地区長にお願いしておりますが、世話を各地区一名選出していただき、幅広く記事や意見を集めたいと思いますので、ご協力をお願いします。

事務局 局長：西村 泉

「新年度の事務局変更にあたって」

私と野鳥の会との出会いは、ある季刊誌の小さな記事から始まりました。以来11年、一番良かったと思うことは、良き友人に巡り合えたということにつきます。自然を残したいと願う者同士が、フィールドに出て観察や調査をしたり、時には議論したりと普段の生活では得られない格別なものがあります。このたび事務局長を引き受けることができたのも私の身近に強力なサポーターがいたからこそともいえます。

十年一昔といいますが、私が入会したころと今とでは環境はもちろん社会情勢も

ずいぶん変わり、行政も何かにつけて会に対して意見を求めてくるようになりました。

今こそ野鳥の会の真価が問われるときではないかと思えます。ひとり一人が自然を通して訴えるべきこと、目指すべきことをきちんと認識し、自分ができる範囲のことを積極的に行っていただきたいのです。私の役割はそうした皆さんの想いを束ねて発信することであり、また外部の情報などを皆さんにお伝えするいわば交通整理係であると思っています。ひとつ指示を間違えると渋滞や混乱したりする可能性があり、とても重要なポストです。

私自身、未熟ではありますが、精一杯頑張りますので、どうぞよろしく願いいたします。

最後になりましたが、長年事務局に携わってこられた木村さん、楢原さんにお礼を申し上げます。



菜高菜

2001年度支部運営役員

各部、局の役員および委員

- 事務局 西村 泉、山田昭子、金児一夫（財務担当）
*林 淳子、*吉井瑞穂
- 保護部 谷本勢津雄、平井正志、田中豊成、中村みつ子、近藤義孝、西口章一、村田芳雄
- 企画部 橋本裕子、岡八智子、斎藤加代子、塗矢博一
*保平長三、*中村洋子、*加島隆子
- 研究部 前澤昭彦、*尾畑玲子
- 編集部 三村通雄、三村明子
*は委員

□ 各地区代表は以下の方々に決まりました。

北勢地区 市川雄二、津 地区 平井正志、松阪地区 谷本勢津雄、
南勢地区 山田昭子、伊賀地区 田中豊成
監事 加藤光廣、西村四郎

各部の活動

しろちどりの保護活動

保護部

シロチドリの繁殖保護

保護部 平井正志

シロチドリは海岸部で周年見られ、特に冬には大群が観察されている。また春から夏にかけて、日本各地の主として内海沿岸の砂浜で繁殖する。三重県では伊勢湾沿岸、志摩半島、熊野灘沿岸と鈴鹿川中流域の一部で繁殖するが、近年、人の海岸利用が激しくなり、繁殖が困難になっている。日本野鳥の会三重県支部では1996年から河芸町から津市にかけての自然海岸で繁殖保護活動を行い、かつ調査を行って来た。しかし、繁殖数は年々減少している。1996年から98年までは週一回の調査を行っており、それ以降は2週に1回の調査になったため、若干の見逃しはあると考えられるが、急激な減少傾向にあることは間違いない。

今年2001年は全県下で繁殖状況の調査を行っている。集計の最中であるが、豊津浦、白塚海岸、町屋浦で観察されたヒナは現在までにわずかに2羽のみである。

北勢地方での繁殖は今年確認されていない。津市の阿漕浦では若干のヒナが観察されているし、志摩半島でもヒナが観察されている。

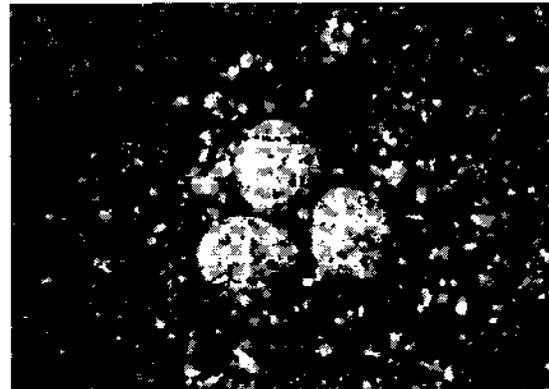
シロチドリは周年見られるが、かつて楠町吉崎海岸で7月に捕獲されたシロチドリは熊本県で11月に着けた脚輪を持っていた。したがってかなり長距離を移動しているようであり、繁殖期に見られる個体群と越冬している個体群とは違うものである可能性がある。越冬や渡りの個体群はさておき、繁殖個体群が消滅する危険性も想定されるであろう。

表 豊津浦、白塚海岸、町屋浦におけるシロチドリの繁殖
(日本野鳥の会三重県支部調査)

繁殖期	観察されたヒナの数
1996年	21羽
1997年	22羽
1998年	14羽
1999年*	8羽
2000年*	6羽

注：1999年、2000年は調査方法が違うので直接それ以前の数字と比較はできないが、減少傾向にあることは間違いない。

写真：海岸に産まれたシロチドリの卵、親鳥が3週間ほど抱卵する。志摩町広の浜にて



(2001年5月6日)

海山町にオオワシが

北川 直人

21世紀幕開けの1月6日、私はミサゴを探して河原にいた。ミサゴは上空を少し旋回して別の場所へ移動していく。そんな時、下流に目をやるとカモメとカモメがやけに騒いでいる。「あれ、おかしいな、ハヤブサでもいるのかな？」と双眼鏡で覗くと、カモメとカモメの中でかいのが一羽混じっている。直感的に「オオワシだ！」とわかった。カメラを担いで河口方向へ走る。しかし、時すでに遅し。

オオワシは高く上がってしまっていた。一応、記録写真は確保した。あきらめきれず河原に座り込んでいると、ミサゴがやってきて大きなボラをゲットした。ボラを驚かみし飛び去ろうとすると、どこからかオオワシがミサゴにアタックした。ミサゴは慌ててボラを落としてしまった。ボラは畑に落ちオオワシも自分の物にすることができなかった。カラスやトビのモビングを受けながら4～5分上空を舞っていたがどこかへ去ってしまった。

翌7日、最初に見つけた場所へ行きしばらく待つがオオワシの姿はない。あきらめ家路につく。途中ウミネコが群れているところで、ぼんやり眺めているとウミネコめがけオオワシが突然現われた。こんどは見逃さないぞと、双眼鏡で飛んでいく先を追っかける。すると、山の中腹に立つ一本の枯れ木に止まった。

8日朝、同枯れ木に止まっているのを確認したが、一度いなくなるとしばらく戻ってこない。しかし、どこから飛んできたのか何時の間にか枯れ木に止まっている。

(この日はオジロワシが上空を通過) 家に帰ってから、フィールドスコープを枯れ木のある山へ向けてみると、なんと木が見えるではないか。

それからは平日も出勤前にスコープでオオワシを確認した。数日後に別の一羽を確認する。はじめに確認したのは♂、もう一羽は♀と思われる。当然、毎週末はオオワシの見える浜辺で一日を過ごした。そのおかげで、海山町ではあまり見ることができない、カンムリカイツブリが6～7羽いるのも確認できた。2月も中旬になるとい

つもの枯れ木には止まらず、山頂付近の枯れ木に止まることが多くなった。同時にいない時間が多くなってきた。餌をとる場所をかえたようだ。3月初旬まではいてくれると思っていたが、2月21日(多分)に北へ向け旅立ったようだ。(湖北に来ていたオオワシも2月21日に北へ旅立ったそうだ)

1月6日から2月20日まで楽しみを与えてくれたオオワシ。ありがとう。また、来年も来て下さい。

オオワシ(天然記念物)

久住 勝治

2月11日 pm 10:30頃、海山町銚子川河口付近で、100から150ヤードの近くよりオオワシを観察しました。紺碧の天空を黒褐色の体、翼前縁とくさび形の尾の白さ、巨大で鮮やかな黄色の嘴、2m余の翼長を羽ばたき一つせず飛翔する姿はまさに王者の貫禄、同行の姫と共に感激に浸りました。今流に言えば「めっちゃラッキー」。Hさん、感動をありがとう。

オジロトウネンの旅立ち

久住 勝治

「しろちどり」29号でお知らせしました越冬中のオジロトウネンが、3月14日無事、元気に旅立って行きました。小石と同じ色で見辛かったのですが、通常3～7羽、最高11羽確認することができました。来期も楽しみにしています。皆様のご協力ありがとうございました。

再会

深田 千鶴子

一昨年、4月上旬の朝のこと、裏の畑の方で小さな鈴が鳴っているような小鳥の音が聞こえた。近づいていくと電線に小鳥が2羽止まっていた。阪神大震災の前年に王子動物園を訪れた際、野鳥禽舎の中にいたヒレンジャクによく似ていた。

慌てて双眼鏡を持ち家に中に入りすぐに戻る。まだ止まっている。早速ピントを合わせる。まさしくヒレンジャク、間違いない。じっくり眺めたら9羽。地面には

緑色の糞が落ちている。飛び立つまで眺めていた。

次の年、待ちに待ったが彼らは現れなかった。今年も待っていたが来なかった。ところが4月5日、松阪市篠田山の探鳥会で彼等に会えたのだ。この日は桜は満開、すばらしいお天気であった。最初にウグイスの鳴いている姿が見られ、他の野鳥もお二十数種、最後に十数羽のヒレンジャクが大木の枝の中で飛び交う姿が見られた。旧友に会えた時の喜びであった。



また数年前隠岐に旅をした。朝早く散歩をしていたら、かん高いきれいな小鳥の声がかんこえてきた。その声に引かれ近づいて行くと電柱の先で青い鳥が囀っていた。

名前はわからない。その泣き声と姿を耳と眼に焼きつけて家に帰った。イソヒヨドリであった。昨年春、西伊豆の堂ヶ島を訪れた。土産物店の横の籠の中で叫んでいるイソヒヨドリに会い悲しい思いにさせられた。しかし、昨秋宇和島では人家の鬼瓦の先端で声高らかに歌っている姿を見てほっとした。私の今の居住地は杉や檜や雑木などが生えている低い山の近くにある農村です。山の方から歌うようなきれいな鳥の声がかんこえ、すぐに遠ざかっていくといくといふことがしばしばあります。

そもそも私が野鳥に関心を持つようになったのは声からということでしょうか。そして、色、動き、姿に感動して「野鳥の会」の仲間に入れてもらいました。できるだけ都合をつけて探鳥会に参加させてもらっています。はや1年になりました。

野鳥を通して、今、失われつつある自然を見つめ人間と他の生物との共生についてこれからいろいろと勉強していきたいと思っております。

『高原のコンサートへの招待状』

宇平 恵子

黄金色に垂れ下がった収穫を待つばかりの麦の穂と、伸び盛りの水稻が眩しいばかりに鮮やかな里山を抜けると、道は新緑の木立を縫うように緩やかにカーブしながら続いて行く。沢のせせらぎの音が次第に間近に聞こえてきて、車の窓を開けると冷んやりした山の空気が肌に心地よい。

360度、見上げるような新緑の樹海が開けた場所で車を降り、林間にこだまする複雑なメロディのさえざりが私達を迎えてくれた。その声の主は、山のピッコロ奏者、ミソサザイ。コンサートの幕開けを告げるプレリュード（前奏曲）……。しばらくすると、今度は「ピールリ、チュル、チュリー」、「我こそは森一番ののど自慢」と甘い美声を響かせるオオルリの登場、節長く奏でるフルートを思わせるような調べに、ハクサンボクの白い花も揺れている。

道路脇に車を止め、徒歩で登り始めた峠に続く坂道で、どこからともなく聴こえてきたかなりスローテンポの「ポッ、ポッ、ポッ」は、木管楽器を思わせるツツドリの声。控えめなのに不思議なくらい心に滲み通る。辿り着いた峠で一呼吸。見渡せば、微かな霧の立ちこめた山の尾根が、まるで一幅の水墨画のように幾重にも重なっている。時折聴こえる「カタカタカタカタ…」速いテンポのドラミングはコゲラ。灌木の茂みからじっとこちらを見ているオオルリのメスの黒い瞳。

帰り道、薄紫色のコアジサイの咲く道を下って行くと、対峙する山の奥深くから、あたり一面にこだまするカッコウの声！遠くに行ったかと思うと今度はかなり近くに。しっとり聴かせるオーボエの音色で、シンコペーションのリズムが実にのどかで懐かしく、足を止めて思わず聞き入ってしまう。「大自然の懐に抱かれる」とは、このような気持ちを言うのだろうか。そして、今やコンサートは最高潮……。

声にならないアンコールの思いに答えるかのように、声の主は、何度も、何度も繰り返し奏でてくれました。

ヤマネに遭遇

三村 明子

6月2日、久しぶりに探鳥会に出かけました。美杉の三重大演習林（毎年開催されているが、参加するのは初めて）で、コノハズクの声を開こうという主旨。

ところでコノハズクの声がわかりますか。〈ブッキョコー〉と鳴き、ききなしを〈ブッポウソー〉といいます。しかし、本当のブッポウソウは〈ゲゲゲゲ〉と、鳴くそうな。聞いたことも見たこともないけれど。

夕方、4時半集合、現地まで走り、まだ、明るいうちに夕食を済ませ本番に備える。なにせ姿は見えないのだから暗くなり、鳴くのを待つ。少し移動して第二ポイントで更に待つ。途中、今年始めてのオオルリに逢った。その第二ポイントで事件は起こった。

第一ポイントでコノハズクの声がするというので再び移動を始めようとした時、ひとりの人が「ちょっと面白いものを見せる」というので、近くにより、私はカブトムシかクワガタだろうと直感。坐っていたその人は、足元に置かれていた帽子をそっと開けるとあろうことか、ヤマネが・・・

以前、長年ヤマネを撮り続けているという写真家がテレビの「徹子の部屋」でヤマネについて対談しているのを見たことがある。その写真家は林業に従事していても一生に一度逢えるかどうか分からないといい、その愛らしい姿に魅せられて八ヶ岳に15年通い続けているという。

ここでヤマネについて一口メモ

《ヤマネはリスやネズミの仲間でげっ歯目に属し、1属1種の日本固有の特産種（世界には8属11種）

- ・ 背中に一本の黒いスジ
- ・ 体重18g、体長8cm

眼がかわいい

夜行性で冬には体温を0度近くまで下げ、丸くなって完全冬眠。国の天然記念物に指定されまた保護獣にもなっているので捕獲はもちろん飼育できない》

話を聞き終えて、私はすぐ写真集を購入。

ヤマネに逢うなんて、私には縁のないことだとその時も、そしてその瞬間まで思っていました。が、今、目の前に本物のヤマネ。実は私、ぬいぐるみを持っていて全くの同サイズ。あの一、ぬいぐるみが動いている。チョコQというおもちゃをご存知の方は想像してみてください。あの小ささ、そしてすばやい動き、その通りです。

せめて写真だけでもと追いかける。その時、ヤマネは何を思ったのか私のズボンを登って上着の中へ。全員の見守る中、一瞬にして消えたのです。それは私の背中で行われたことなのです。重さは全く感じられませんが、間違いなく私はあのヤマネをおんぶしたのです。

それはもう、母なる喜びです。もちろん一枚の写真に収まり、その後山へ帰っていきましたが、少々(?)追いかけられたストレスがトラウマにならないことを祈るばかりです。



ありがとう。また、いつの日か逢いたい。その夜は近くで泊まりましたが、夜中には遠くでアオバズク、明け方にはホトトギスの声と実に素晴らしい初夏を夢ごちで過ごした一日でした。

『兄の思い出』とブッポウソウ

川口 久美 (みです)

6月2日(土)、「美杉探鳥会くノハズクの声を開こう」に参加させて頂いた。

三重大演習林駐車場で、その声を聞きながら私は遠い昔のことを思い出していた。

私がまだ幼いころ、ある日「兄」がスズメの巣立ち雛を拾ってきて私に見せた。

おそらく私がせがんだのだろう、大切にしていたヒナをそっと私の手に持たせてくれた。スズメの子は、逃れようと私の手の中で「グルリグルッ」と動いた。すべすべした羽毛につつまれた小さな生き物の、その心地よくも不思議な感触は今でも覚えている。

少し大きくなったころ、我が家では数羽のニワトリを買っていた。

昔の田舎のこととて、昼間は庭に放し、鳥たちはあちらこちら歩き回って上手に足と嘴を使い小虫を食べたり遊んだりしていた。長閑なものである。

日暮れ近くになると、その鳥達を小屋に追い込むのが兄と私に課せられた日課であった。

なかには小屋に入りたがらないのもいて、その時は二人で小走りに追いかけると、すぐに観念して翼をすくめうずくまるのでいとも簡単に捕まった。

抱き上げて頬ずりすると、絹のような感触の羽毛をとおして、骨っぽい体から厚い体温と鼓動が伝わってき、乾いた麦わらのようないい匂いがした。

その後、兄も私も大人になってお互いに家庭を持ち、そろそろ中年にさしかかってきたころ、兄は肝臓に腫瘍が見つかり入院した。

長い間、入院した。

有る日私がベッドの横で、当時月刊で発行されていた自然科学誌「アニマ」を所在なく見ていると、兄は

『きままにそんな趣味を愉しんでいるお前がうらやましいよ』と言った。

油絵が趣味で、自宅に「アトリエ」まで作り、画壇でも少し名が知られたほど「好き放題」している兄がそんなことを言うのはおかしいと思った。

いま考えてみると、死を覚悟した兄の、初めて私の前でみせた「弱音」だった。

それからまもなく逝った。手遅れのガンであった。

もう、十五年も前のことである。

いま、リュックに枕を仰向けに寝て目を閉じ、胸に手を合わせ、くノハズク聞いている。

「ブッキョッコー ブッキョッコー
ブッキョッコー」

あちらでもこちらでも、呼び交わすように鳴いている。

月明かりのなか、哀調を帯びたその声は杉木立を縫って森に響き渡る。

そして、遠い昔を思い出している私の胸にも切なく響いた。



みむ一の中国通信(1)

三村 祥子

你好!私は今中国の杭州という、上海の下、汽車で二時間のところに留学しています。

「西湖」という湖で有名ですので知っている方もいるのではないのでしょうか?

気候は日本とほとんど同じです。だから今が梅雨の真っ最中。

中国はやはり自転車が多いです!何でもかんでも自転車で移動する国と言っても過言ではありません。

自転車, 三輪車, 人力車, 等々...一昔前の日本を思い出させる風景です。

しかし、市の中心街は日本の都会と変わらないくらい発展しています。例えばデパートやホテルが何件も立ち並ぶ『武林広場』高層ビルが立ち並ぶ風景はどう考えても三重県の四日市を軽く越えています。悔る無かれ中国を。

野鳥の種類も日本と若干違います。

例えば日本ではムクドリという鳥が大集団を作って木の上に止まっていたりという光景を目にしたりますが、中国にはどうもムクドリはいないみたいです。その代わり目の上に白い模様があるムクドリ大の鳥を木の上、芝生の上でよく見かけます。

ムクドリを中国語で言うと「白頭翁」というのももしかしたらこれが中国のムクドリなのかもしれません。

中国に対して皆さんある程度固まったイメージがあると思いますが、これからみむ一が生きた中国を随時紹介していきたいと思います。



● 余野公園探鳥会 (伊賀町)

日時: 1月28日(日) 9:45~13:00

担当: 塗矢 博一

参加者: 8名(会員)

観察種: ビンズイ・カシラダカ・アカゲラ・シロハラ・ヒトドリ・ヒガラ・シジュウカラ・エナガ・ハシブトガラス・キジバト・メジロ・カケス・ヤマガラス・スズメ・ホシジロ・アオジ・ルビキ・セグロセキレイ

18種

コメント

植林が多いので小鳥が少なく、雑木林の方で多く出た。

● 東紀州地区探鳥会 (海山町)

日時: 2月4日(日) 9:45~13:00

担当: 三村 通雄

参加者: 13名(会員)

観察種: オオシ、ミサゴ、ノスリ、ホシジロ、カラヒリ、ヒトドリ、ウグイス、アオジ、カンムリカイツブリ、アオサギ、ダイサギ、ウミウ、セグロカモメ、ウミネコ、オオセグロカモメ、カカモ、マガモ、キセキレイ、ツグミ、カケシ、キンクロハジロ、ヒトリカモ、カイツブリ、ホシハジロ、ベニマシコ、シロハラ、セグロセキレイ、エナガ、ムクドリ、メジロ、ジョウビタキ、モズ、ユリカモメ、トビ、コサギ、カウ、カシラダカ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、トビ、スズメ、

(イワツバメ 巣のみ)

42種

コメント

今年は晴れとまではいかないが、曇り程度で取り敢えずの天気であった。

今回、観察地の小山浦ではオオシが出て、たつぷりと観察できた。同地でノスリ、ミサゴも同様に観察できた。一箇所ではカンムリカイツブリ、カモメ類等の海鳥と鷺鷹類が観察できると皆さんには好評であった。

● 揖斐川探鳥会 (多度町)

日時: 2月25日(日) 9:10~12:00

担当: 近藤 義孝

参加者: 17名(会員)

観察種: イカル、ノスリ、キセキレイ、ツグミ、カカモ、カウ、カラヒリ、アオサギ、キジバト、ハセキレイ、ミサゴ、カカモ、タケリ、イソギ、キンクロハジロ、ホシハジロ、ケリ、モズ、アトリ、チュウビ、ホシジロ、オオシ、カシラダカ、ハヤブサ、ヒトドリ、

探鳥会報告 (2~4月分)

ニュアイスメ、カイツブリ、ムクドリ、ハシボソガラス、タビバリ、セグロセキレイ、スズメ、メジロ、トバト

34種

コメント

チュウビ、オジロギスなどが観察できた。冬のアシ原で見られる鳥と風景を楽しめた。冬型で快晴だったが、冷たい風が少し辛い天気であった。

交通量が多く、車の駐車させる場所や観察場所にもう工夫必要だった。

環境変化や問題

揖斐川の堤防下のアシ原が埋められていて、国土建設省あたりの仕事に使用されている。ヒクイナやバンが観察できる場所だったので、元に戻すように働きかけたい。

● 海蔵川探鳥会 (四日市市)

日時：2月22日(日) 10:00~12:00
担当：尾畑 玲子

参加者：8名(会員7名、非会員1名)

観察種：カイツブリ、モズ、ムクドリ、バン、チョウゲンボウ、ツグミ、キジバト、セグロセキレイ、ハセキレイ、ホシジロ、アオジ、カラビロ、ウグイス、カウ、カカモ、ヒバリ、タビ、ヒトリ、イカル、メジロ、タビバリ、ハシボソガラス、ハシボトガラス、トバト

25種

コメント

人数が少なく、まとまったためかゆっくりと且つ、時間内に見てまわれた。今回はあまり、河川改修に触れずに”見る”ことに集中した。

環境変化や問題

この川でよく見られるオオフサモが寒い時期なのに、もう緑の新芽を茂らせている。この冬の暖かさをもの語っているように思えた。

● 五十鈴川上流探鳥会 (伊勢市)

日時：2月25日(日) 10:00~12:00
担当：世古口 有司

参加者：24名(会員19名非会員5名)

観察種：カウ、ハイカ、ノスリ、クマカ、キジバト、カセミ、コガラ、セキレイ、セグロセキレイ、ヒトリ、カワガラス、ジョウビタキ、ツグミ、シハラ、エガ、ヤマガラ、シヨウカラ、メジロ、ホシジロ、アオジ、カラビロ、イカル、ハシボトガラス

計23種

(鳥合わせの時、鳥を見た場所<川の中、浅い場所、岩、林など>を同時に言って貰いその関連を考えてもらうことにした。

コメント

杉浦支部長担当の探鳥会であったが、支部長が他の用件で来られなくなったため、やむなく他の者で開催した。南勢地区の探りリーダーの皆さんの協力で無事終了したが、支部長目当てに参加した方には不満であったろう。環境変化や問題

カワガラスやクマカもいたので豊かな環境と言うことにはなるのだろうが、工事のダメージはまだ残っており、支部長が言う程には自然は回復していないと思った。強風のせいもあり、鳥は種、数とも少なかった。

● 第一土曜斎宮池探鳥会 (明和町)

日時：3月3日(土) 9:00~11:30
担当：西村 泉

参加者：14名

観察種：カウ、アオジ、ツグミ、メジロ、カカモ、シヨウカラ、ノスリ、エガ、ヒトリ、カセミ、ジョウビタキ、シハラ、ウグイス、アオジ、カラビロ、ハセキレイ、モズ、トビ、キジバト、ホシジロ、スズメ、シギ SP、ハシボトガラス

24種

コメント

今の里山あ抱える竹とゴミの問題がよく分かるコースを歩いた。粗大ゴミが捨ててある所で、参加者の嘆きの声が聞かれた。

環境変化や問題

- ・ コース途中で遺跡発掘作業現場が有り、四角に掘られていた。
- ・ 不法投棄のゴミが目に残る。
- ・ 竹の侵入が著しい。

● 宮川中流探鳥会 (渡会町)

日時：3月11日(日) 9:30~11:30
担当：吉井 瑞穂

参加者：14名(会員13名非会員1名)

観察種：イカル、カカモ、マカモ、オドリ、カウ、ヤマセミ、セグロセキレイ、ハセキレイ、セキレイ、タビバリ、ヤマガラ、イカル、トビ、ヒトリ、ムクドリ、ジョウビタキ、モズ、ウグイス、アオジ、カラビロ、イヅナ、メジロ、ヤマガラ、ホシジロ、キジバト、トバト、スズメ、ツグミ、ハシボトガラス、ハシボソガラス

30種

コメント

企画した担当者に代わって急速リーダーを務めることになったので、企画の趣旨に沿った探鳥会とは異なった。宮川の水辺に降りられたらよかったと思う。

地元の方が参加されていて、中止になった渡しの話などしてもらえたのは良かったと思う。

● 坂内川探鳥会 (松阪市)

日時：3月16日(金) 9:30~12:00

担当：中村 洋子

参加者：18名

観察種：ムクドリ、キジバト、ツグミ、ヒトドリ、コガモ、ノシキ、ハシボトガラス、ツバメ、ハクセキレイ、カワヅクリ、コサギ、ダイイキ、ウグイス、アオジ、カラビリ、セキレイ、バン、スズメ、ホシジロ、シロハラ、ジョウビトキ、メジロ、カワ、ユリカモ、イカルドリ、タヒバリ、モズ、カカモ、トビ

29種

コメント

この鳥はヒトリ、イカル？皆で図鑑を見、その鳥をよく見ました。その結果、イカルでした。

● 篠田山探鳥会 (松阪市)

日時：4月5日(木) 9:30~11:30

担当：中村 洋子

参加者：20名(会員17名非会員3名)

観察種：ウグイス、ケリ、キジバト、ツグミ、ヒトドリ、シロハラ、ツバメ、コサギ、モズ、ヤマカシ、ヒンズメ、アオジ、コサギ、メジロ、ヒバリ、ムクドリ、アサギ、スズメ、ハシボトガラス、カワ、シヨウカラ、ヒレンジャク

24種

コメント

探鳥会とお花見を兼ねて、冬鳥のシロハラ、ヒレンジャクがじっくり見られた。

● 三雲町海岸探鳥会 (三雲町)

日時：4月22日(日) 9:30~11:00

担当：久住 勝司

参加者：13名(会員)

観察種：カモ、ヒトドリ、キンクロハジロ、スズガモ、ハシボトガモ、コサギ、カサギ、コガモ、セグロカモ、カイツブリ、バン、コサギ、アサギ、ダイイキ、ケリ、チュウシキ、ツグミ、ノシキ、オハシキ、イカルドリ、ヒトドリ、カラビリ、ホシジロ、トビ、ツバメ、スズメ、ハクセキレイ、セッカ、ツグミ、ムクドリ

35種

コメント

観察種もまずまず、参加者に見て欲しかったシマアジ、コムクドリが見られず、それだけが残念

環境変化や問題

雨上がりの強風と潮干狩り客と条件は悪かったが、テーマに沿ってそれなりに実施できた。

潮干狩り客がある時期の開催に一考を要す。

● 木曾岬探鳥会 (木曾岬村)

日時：4月22日(日) 9:00~12:00

担当：近藤 義孝

参加者：13名(会員)

観察種：カイツブリ、カワ、ユリカモ、キンクロハジロ、カカモ、ホシジロ、コガモ、オハシキ、アサギ、ダイイキ、コサギ、コイイキ、コトドリ、ケリ、ハマシキ、クサシキ、ノシキ、チュウシキ、ダイゼン、ミソコ、チュウビ、トビ、ツグミ、スズメ、カサミ、ヒバリ、キジバト、キジ、セッカ、ツバメ、ハクセキレイ、タヒバリ、カラビリ、ムクドリ、シロハラ、ハシボトガラス、ハシボトガラス、トビ

39種

コメント

天候に恵まれ多数の鳥が観察できた。

環境変化や問題

木曾岬干拓地の中を通る第二号神道路も完成に近づいています。遮光板などについても設置を要望することになりました。

● 上野森林公園探鳥会 (上野市)

日時：4月29日(日) 10:30~14:00

担当：塗矢 博

参加者：10名(会員)2名(非会員)

観察種：イカル、ホシジロ、ヒトドリ、カラビリ、ツバメ、トビ、ハシボトガラス、ハシボトガラス、ウグイス、シヨウカラ、カワ、モズ、コサギ、カイツブリ、ケリ、キジバト、ダイイキ、コサギ

18種

● 鈴鹿川中流探鳥会 (亀山市)

日時：5月4日(金) 9:30~11:30

担当：植橋 泰

参加者：15名(会員)

観察種：カワ、カカモ、ダイイキ、アサギ、イカルドリ、ケリ、ノシキ、キアシキ、キジ、コサギ、ユリカモ、カサミ、コサギ、ヒバリ、ツバメ、セキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒトドリ、モズ、

お知らせ・編集後記

セッカ、ウグイス、ホシジロ、アオジ、カラビロ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

29種

コメント

種々話したつもりでも後になって言い足りない所があった。

環境変化や問題

農業用水導水のため土砂による流路変更があり、これによって川原(砂州)のでき方が変わり、カササギ営巣の適地が減少しているように思った。

● 齋宮池探鳥会(明和町)

日時: 5月5日(土) 9:00~11:30

担当: 西村 泉

参加者: 7名(会員) 1名(非会員)

観察種: ホシジロ、ツバメ、カイツブリ、ヤマガラス、コゲラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、メジロ、エカキ、カササギ、ウグイス、アオサギ、セッカ、カラビロ、ムクドリ、スズメ、ダイサギ、カワウ、ツツドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

23種

コメント

緑が湖畔に映え、景観は美しいが、林の中に入ると里山に共通する様々な問題を目にすることができる。池のぐるりを歩き今の里山の現状を見て貰った。

環境変化や問題

齋宮池周辺は意外と余暇活動の場として利用されている。波瀬街道が通っており、当日も多くの人に出会った。

「しろちどり」の原稿の宛先は・・・・(イラスト・表紙絵も大募集)

〒

三村 通雄 宛でお願いします。

Tel (FAX)

e-mail

取り上げて欲しいテーマ。またはこんなテーマはいかがですか?などのアドバイス。

川柳・短歌も大歓迎。

原稿の集まりが悪いとか!。会員の皆様が頼りですので宜しく。

記事訂正

30号の内容訂正

9ページ 理事会通信で、2000.7.16とあるのは2000.11.23の誤りです。お詫びして訂正します。

13ページ 野鳥への記事についての私見 2 「冬期に餌が不足する意味で行う→冬期に餌が不足するのを補う意味で行う」に訂正。

編集後記

前任者よりの引継ぎで初めての紙面作りです。全てが初めてなので戸惑うことばかりですが、何とか仕上がりました。

向こう2年間試行錯誤を繰り返しながらの任務全うの覚悟です。

連休には山陰に出かけていました。こんなところにもソウシチョウの声となると、一体この国固有の自然はどうなっていくのだろう。

昨今の暗い、悲しいニュースの中、特別の野球ファンでもないが、楽しみは日本人大リーガー達の活躍ぶりを、聞きながらの朝食にある。

A・M

しろちどり 第31号 2001年6月発行

題字 濱田 稔

表紙絵 田中 豊成

編集 三村 通雄

〒

発行者 (財)日本野鳥の会 三重県支部

杉浦 邦彦方

〒516-0026 伊勢市宇治山田浦田2丁目9-4

印刷 館 印刷

〒510-1321 三重郡菟野町田口1903-3

●本誌掲載記事の無断転載を禁じます。●